

りて来るのや、此な事は無い事やで、側にあつた筵を敷て其の上へ俺の襦袢ほつこを着て其の上へお玉を座らして三尺下つて土下座したんや。」

「そんな事を仕いないはア。」

「オイ玉チャン一服しい、と煙草入と煙管を渡すと、よばれよ、と煙草を二服飲んで三服目の煙草を俺に、煙管の吸口を袖で拭て、チャン吉さん御免、と呉よつた其の煙管を受取つた時に俺は身體が細う震ふたんや、見ると煙管の吸口に唾が附いたある、拭くのは勿體無いので吸口を横に吸ふた其の時の美味うまかつた事。」

「そんな物を吸ひたいナア。」

「玉チャン都へ行つて、此んな草深い處へ來たら嘸し淋しいやろうナア、と聞いたたら、アノ村の若い方が皆可愛がつて呉はるので妾は喜んで居ます、マアそうかいなアしかし京都には好きな人があゝるねんやろなア、と云ふたると、ナンの妾にそんな者がおすかいナア、ア、そうかそんなら每晚若い者が澤山肩入に行つてるが中に好きな男があるなら云ふてや、と云ふたら、そら妾やとて木竹やなし女やもん好きな人の一人や半ブンは無い事は無いが、兎角浮世と云ふ物は儘ならぬ物で、成は否なり思ひは成らず、ツイ辛氣に暮して居ますがな。」(ボカン)

「オイ無茶を仕ないナア、俺の頭を殴つてからに痛いナア。」

「それから如何どうしたんや。」

「オイ、前へ行きなや、頭殴られるぞ。」

「オイ玉チャン、そんな人があるなら云ふてんかいな、俺が提灯持位はさして貰ふで、誰やえ、と云ふたら、妾の好きなお方と云ふたらつい目の先に、とこないに云ふので其所等を見たが誰も居えへんやろ、まさか俺かとも云へんで、此の鉢か、擔桶か、土壺かと尋ねてやつたら、何程妾の様な者でも鉢や擔桶に惚れて何うしまんのやいな。妾の好きな方と云ふのは、半鐘のチャン吉さんあんたでおますがナア。」(顔を搔く)

「オイ痛い、オイ痛い、何をするのや人の顔を搔いて、痛いかな。」

「イヤ——、俺何方向てる。」

「夢中で目も見えへんのか、そしてお玉が、半鐘のチャン吉さん、あんたでおます、と云ふたのか。」

「サア、俺ではとても六ヶ敷い。」

「ナンヤ六ヶ敷いのか、人の顔を搔きやがつて。」

皆若い者がやかましく云ふて居ます所へ向ふから、鎌を一挺持て踊て來よる奴がおます。

「チョイトく、コラく、エライヤツヤ、嬉してたまらん、お玉の色男は俺ぢやぞ、ドッコイく、コラく。」